©日本カムリ学会 2010
Cylchlythyr 21:2-4

研究紹介　*Rhif 15*

Edward Jones 著 *Musical and poetical relicks of the Welsh bards* 1784 年

寺本圭佑

18 世紀後半にアイルランドのジェームズ・ダンガンは次のように語った。「ウェールズのハープは興隆している。スコットランドのバグパイプも興隆している。だが、哀れなエリンのハープは衰退しつつある」。

この言及どおりハノーヴァー王朝において、ウェールズのハープは宮廷での地位を回復する栄光に浴していた。*Musical and poetical relicks* の著者、エドワード・ジョーンズ（1752-1824）、通称 Bardd y Brenin（王のバード）もプリンス・オブ・ウェールズの宮廷ハープ奏者であり、同書は後のジョージ 4 世となるこの皇太子に献呈された。ジョーンズは北ウェールズ Llanderfel 出身のトリプルハープ奏者であり、主にロンドンで活躍する一方で、ダブリンの劇場でも演奏活動を行っていた。彼は演奏家・作曲家、ハープ教師としてだけでなく考古研究家 Antiquarian としても有名で、古い手稿譜を収集していた。

18 世紀のウェールズではルイス兄弟やペナントらによって、考古研究が盛んに行われていた。これらの研究に加えて、スコットランドのマクファースンによる『オシアン』や、深い親交を持っていたチャールズ・バーニーの『音楽史』もジョーンズの著作に少なからぬ影響を与えたであろう。

当時の考古研究家は、ある研究対象が古ければ古いほど価値が高いとみなす傾向があり、伝承の遺品や風習に対して古代文化の名残を追い求めていた。その考えは音楽にも敷衍され、ジョーンズの著作も自国の音楽文化の古さを立証することで文化的優越を顕示しようとする意図があった。そういったバイアスを差し引いたとしても、同書はウェールズのバード音楽や演奏習慣についてのさまざまな叙述に満ち溢れている。バードたちの集会であるアイステズヴォドの起源やバードに与えられた称号、その称号を得るために必要とされた条件など、ウェールズのバード音楽についての広範な情報と、興味深い民俗伝承が記されている。特に、当時廃れつつあったウェールズの伝統楽器クルゥスの調弦法の記述は、現代の研究者にとって貴重な資料となっている。

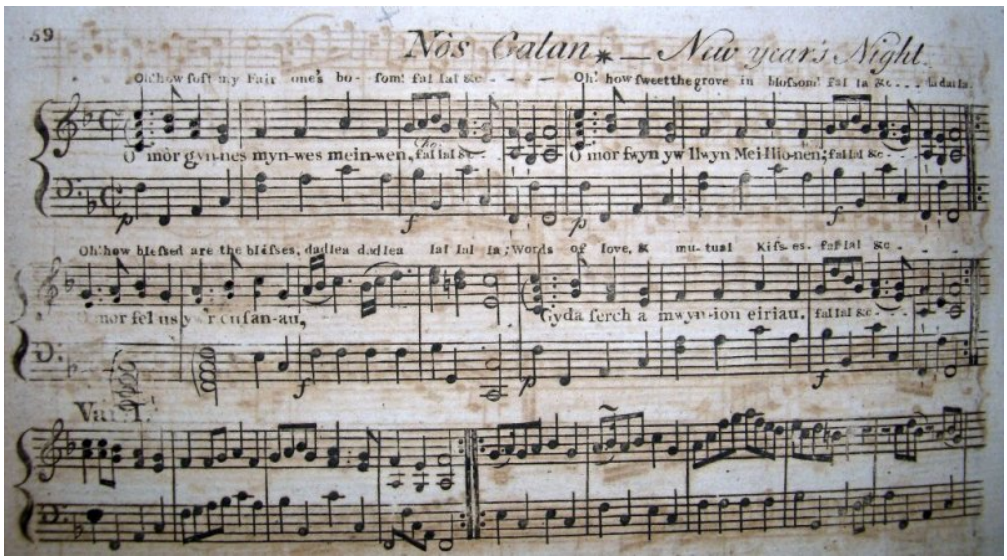
一方で、同書にはバードの詩も掲載されている。グリフィズ・スゥイドというバードがオウェン・グリンドゥルのために書いたオードや、同じスタンザを反復せずに途切れることなく歌い続けるペニリオン、そしてグリフィズ・アプ・サウェリンのグレイハウンドのためのエングリン（俳句とも比較される一連で作られる詩の形式）などが、ウェールズ語と英語の対訳で記されている。

とりわけ興味深いのは、後半に掲載されているウェールズ音楽の楽譜である。

©日本カムリ学会
Cylchlythyr 21:2-4

この著作において、初めてウェールズ語によるタイトルでウェールズの民俗音楽が出版されたことも特筆すべきであろう。18 世紀に流行した変奏曲の形式で書かれているものが多く、編曲者の高い演奏技術をしのばせるハープの特性を生かした、きらびやかな演奏技法も効果的に用いられている。クリスマスに歌われる≪ひいらぎ飾ろう Deck the Hall≫として有名な≪Nos Galan≫の変奏曲は同書で初めて印刷譜として出版された。ほかにも、よく知られたウェールズ民謡≪Dafydd y Garreg wen≫も収録されており、曲に関する逸話も記されている。≪Consêt Gruffydd ap Cynan≫や≪Consêt Daffydd ap Gwilym≫など、12 世紀のグウィネッズ公や 14 世紀の詩人をほのめかすタイトルがつけられている曲が散見されるが、現在ではこれらの音楽は 18 世紀以降に作られた音楽であると考えられている。

ジョーンズの著作は単に 18 世紀のウェルシュ・ハープのレパートリーを知る学術資料としてではなく、そのまま現代のハープ奏者のレパートリーとしても活用されている。これらの点において、ジョーンズの楽譜は資料的価値とともに音楽的価値をも同時に兼ね備えているのである。



金城学院大学図書館所蔵
Musical and Poetical Relicks of the Welsh Bards 第 3 版から
≪Nos Galan≫のテーマ